



Weekly Market Report

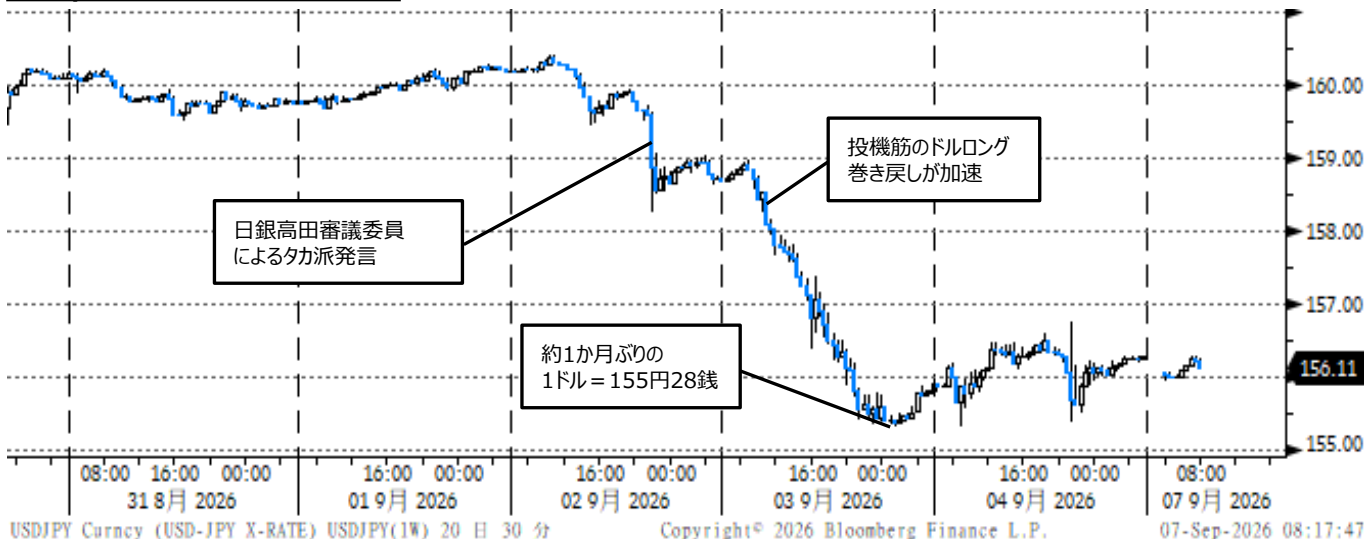
FX, JPY Interest Rate, Topics

Sep 7, 2026

1. 為替相場概況

米中間選挙に向けて着々とドル安円高地合いの醸成も、FRBの利上げ観測に注意したい。

USD/JPY (1週間の値動き)



コメント

(出所) Bloomberg

先週のドル円相場は1ドル＝160円台前半から約1か月ぶりの155円台前半まで、急激な円高・ドル安が進む展開だった。週初一時160円台を付ける場面もあったが、為替介入への警戒感が重荷となり159円台後半での推移。しかし2日、日銀の高田審議委員からタカ派発言があり、次回会合での利上げ期待が上昇し円買いが加速したことに加え、米8月ADP雇用統計が予想を下回りドル売りが進み円が上昇。これらが引き金となり投機筋のドルロング巻き戻しが加速、3日には約1か月ぶりである155円28銭まで下落。4日、注目の米雇用統計が予想上振れたことからドル買いが一時再燃したものの休日前であることも相まり、行ってこいの結果となり、155円台前半で越過。今週は先週の地合いを引き継ぎ、下値を探りつつ神経質な動きになると予想。翌週の日銀会合を控え円が買われやすい状況が続く一方、10日に発表される米CPIにより原油価格の上昇を受けたインフレ高止まりが示されれば、FRBの利上げ観測が強まりドル買い戻しに繋がる可能性も。(市場営業部/鈴木)

今週の経済指標 (予定)

日付	イベント	予想
9/7(月)	(欧州) 4-6月期GDP	1.0%
9/8(火)	(日本) 4-6月期GDP	1.8%
9/10(木)	(欧州) 中央銀行政策金利	2.65%
9/10(木)	(米国) 8月卸売物価指数 (PPI)	5.2%
9/11(金)	(米国) 8月消費者物価指数 (CPI)	3.4%

USD/JPY (5年間)



(出所) Bloomberg

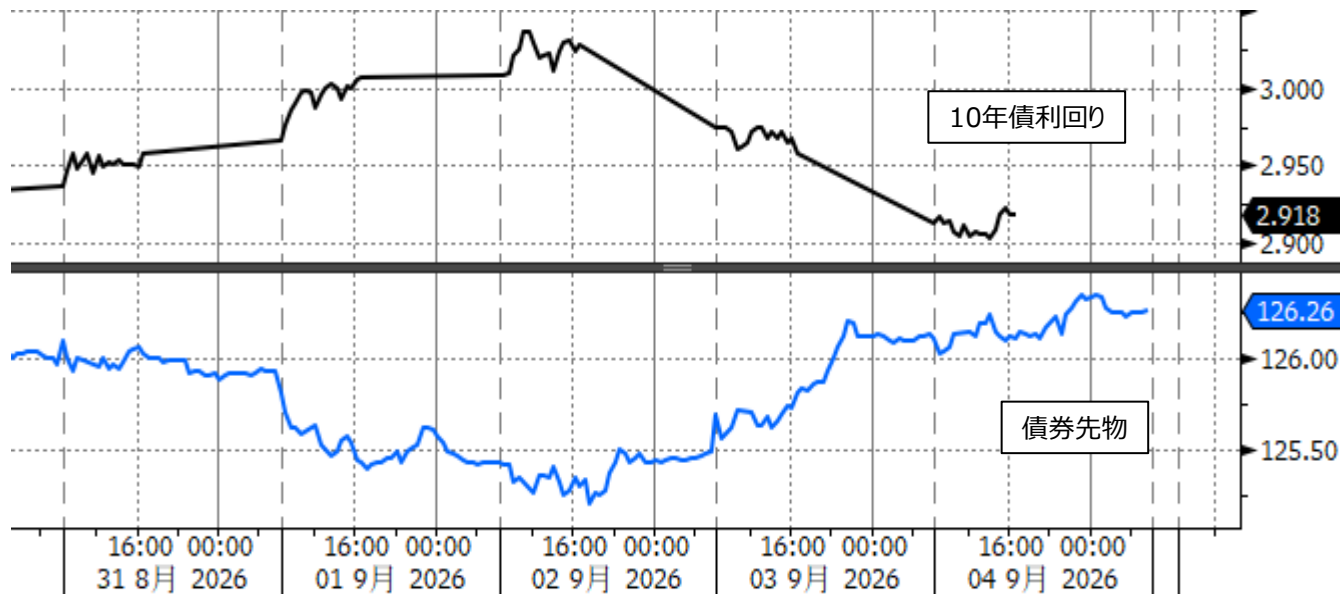
今週のレンジ予想 (USD/JPY)

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
亀城彰太	155.00 – 157.00	今週末の米CPI発表を控え膠着した展開を予想。但し、米利上げ観測後退を促す他の材料による円高進行には注意。
渡邊和也	154.50 – 158.50	米CPIが上振れた場合、利上げ観測が強まり再び円安が進む可能性。円高方向では155円を下抜けられるかが焦点。

2. 円金利相場概況

1996年以来節目の3%に到達。今週も日銀利上げ観測に注目が集まる。

10年国債金利と債券先物（1週間の値動き）

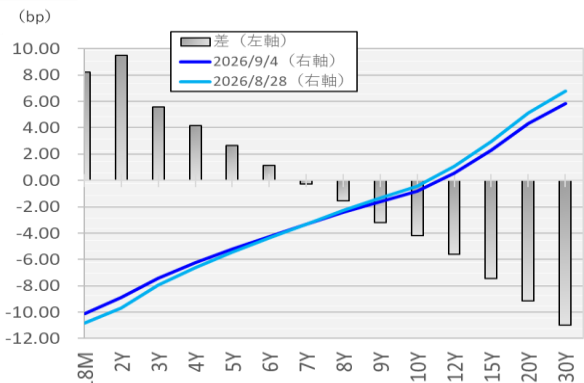


コメント

(出所) Bloomberg

先週の10年国債利回りは激しい値動きとなった。週初はジャクソンホール会議でウォーシュFRB議長の発言を受け、インフレ抑制に向けてFRBが9月に利上げするとの観測が高まり米金利が上昇したことで円金利も上昇してスタート。複数のメディアが概算要求の総額が過去最大の140兆円前後まで膨らむ見通しと伝え、日本の財政運営への懸念がくすぶっていることも円金利上昇要因となり、1996年以来節目の3%に到達。週中には、日銀の植田総裁がインフレ上振れリスクへの警戒感を示したことや、高田審議委員の発言を受け、日銀の早期利上げ観測が高まったと受け止められ円金利は上昇。週末には、ニューヨーク連銀のウィリアムズ総裁がインフレ期待は落ち着いているなどハト派的な発言をし、前日の米金利が低下したことを受け、円金利は前営業日引けより大幅低下し、10年債利回りは前日比▲5.8bpの2.908%で越週した。本日の10年債利回りは上昇してスタートしており、今週も引き続き日銀利上げ観測に注目。(市場営業部/川上)

金利スワップ変化（1週間）



10年円金利スワップ推移（5年間）



(出所) Bloomberg

今週のレンジ予想（10年国債利回り）

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
遠藤風翔	2.85% - 3.00%	翌週に日米中銀イベントを控える中で、今週は8日の5年債入札および10日の増日銀審議委員のコメントに注目したい。
飯野りさ子	2.85% - 3.00%	10日の金融経済懇談会における日銀増審議委員の発言に関心が集まる。タカ派的発言があれば金利上昇の可能性も。

3. 今週のトピックス

英ポンド相場動向

バーナム首相による財政支出の拡大懸念が英国長期金利の上昇と英ポンド売りの材料に

<英国経済の状況>

英国の8月購買担当者景気指数（PMI）は、総合が52.5と好不況の分かれ目となる50を上回り、前月の52.2から改善する結果となった【図表1】。製造業は51.7（前回51.9）と減速傾向が続いたものの、サービス業が52.5（前回52.1）と堅調さを維持したことが景況感の押し上げに貢献したとみられる。英国景気については、4-6月期の失業率が4.9%（前回4.9%）と雇用市場の改善がそれほど進んでいない中、7月のコアCPIは前年比+2.6%（前回+2.6%）とインフレは落ち着きつつある状況となっている。イングランド銀行（BOE）による2026年のGDP成長率見通しは+1.1%と前年の+1.3%からやや減速する見込みだ。

<イングランド銀行の金融政策と金利動向>

イングランド銀行（BOE）は、7月の金融政策会合で政策金利を3.75%で維持し、5会合連続の据え置きとしている。声明文における「必要があれば行動する準備がある」といった文言は前回会合と同様だったが、ベイリー総裁からの「英国のインフレ圧力は限定的でBOEは利上げ方向には傾いていない」といったハト的な発言を受けて、年内の利上げ織り込みは現在1.2回程程度となっている。BOEはエネルギー価格の上昇に伴う二次的波及効果が生じるリスクを今後慎重に見定めていく方針だ。英国金利については、BOEの利上げ期待に加えて政府の財政支出拡大への懸念から2年、10年金利はほぼ平行に上昇しており、長短スプレッドは横ばいで推移している【図表2】。

<英ポンド相場の見通し>

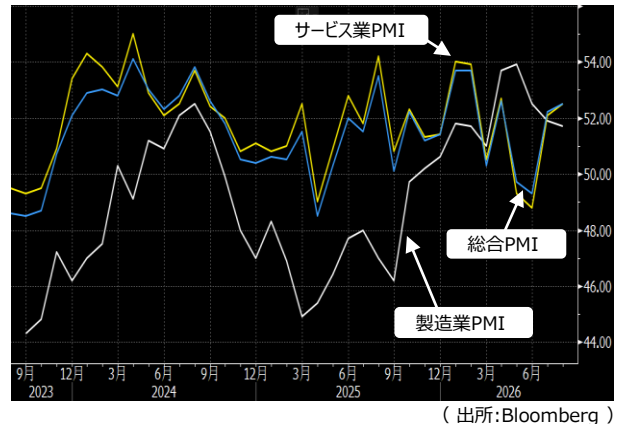
英ポンドの対ドル相場については、6月に1.32割れの年初来安値を付けたあと、米国の財政赤字拡大懸念によるドル売り地合いの中で1.36台を回復したが、英国景気への懸念から再び下落している状況だ。

英ポンド相場については、引き続きBOEの利上げ期待が下支えとなってくるものの、スターマー氏に代わって新首相に就任したバーナム氏が財政拡大に前向きな姿勢を示していることが英国財政への懸念を高めており、英国金利の上昇と英ポンド売りにつながっている。10月下旬に発表が予定されている2027年度の秋季予算案の内容は注目となりそう。また、英国の貿易収支で財を中心とした赤字基調が続いていることも英ポンド相場の下押し要因となってくる。

当面の英ポンドは、対ドルでは200日移動平均線のある1.345を中心とした1.3100-1.3800のレンジ、対円では207.00-217.00円で上値の重い推移を見込んでいる。シカゴIMMの投机筋ポジションでは、英ポンドのネットショートが5万枚程度となっており、以前ほどポンド売り圧力は強まっていないものの、積極的にポンド買いを積み増す動きもあまりみられない状況といえそう【図表3】。

（チーフ・マーケット・ストラテジスト／諸我 晃）

【図表1】英国の購買担当者景気指数（PMI）



【図表2】英国の政策金利と2・10年金利（%）



【図表3】英ポンドドル相場とシカゴIMMポジション



ご留意事項

- ・本資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、取引の申し込みでも、取引締結の推奨でもなく、売買若しくは何らかの取引を行うことを助言したり、または勧誘したりするものではありません。
- ・本資料の内容につき、当行はその正確性及び完全性を保証するものではなく、一切の責任を負いません。ご利用に際しては、ご自身のご判断をお願いします。
- ・本資料に基づき、お客さまが投資のご判断をされた結果に基づき生じた損害・損失等については、当行は一切責任を負いません。
- ・本資料は著作物であり、著作権法により保護されております。無断で本資料の全部または一部を複製、送信、転載、譲渡および配布することはできません。
- ・本資料に掲載された各見通しは本資料作成時点での各執筆者の個人的見解に基づいており、それらは必ずしも当行の見解を反映しているとは限らず、また、予告なしに変更される場合があります。



商号：株式会社あおぞら銀行（登録金融機関 関東財務局長（登金）第8号）
加入協会：日本証券業協会、一般社団法人金融先物取引業協会、日本商品先物取引協会